
少女ジグザグ暴走中

上葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少女ジグザグ暴走中

【Nコード】

N9861X

【作者名】

上葵

【あらすじ】

幼なじみのお願いで、昔学校にあった変なクラブの復活を手伝うことになったけど、正直ダルいので、また明日から頑張ればいいや。

0 (前書き)

長い生暖かい目で見守っていただければ幸いです。

基本テイストとしてはギャグ：シユール　：真面目を6：4：0で
お届け出来たらな、思っております。たぶんダメですが、その旨
了承ください。

乾燥しきつた埃まみれの気流が、カビ臭さを伴って俺の鼻孔を刺激した。

最悪だ、全くもってついていない。クリーム色のカーテンを透過する光にぼんやり照らされた室内は、ガラクタだらけの廃棄場のようで、用途不明の鉄パイプが墓標めいた影を落としている。

「骨が折れそうね」

ドアを開けた彼女はこれから始まる引越し作業を想像してか、げんなりとした息をはいた。

隣で関節の空気を抜くように伸びをする。冷静になっておかれた状況をまとめるのならば、

この学校にあつたという変な部活に所属したいが、もうすでに廃部になっていたので、復活させるしかないでしょ、とのこと。

顧問していた先生に相談してみたところ、部員の確保と部室の掃除をやるなら、また担当してやってもいいと了承をくださったので、まずは部室の確保に乗り出したというわけである。

「それじゃ、箒で床を払っておくから、郁次郎は一階の準備室に余った机を運んでおいて」

キラキラと反射する埃の粒子を鑑みるに掃き掃除は確かに必要だろう。だがしかし、それは床を荷物が占拠してなければの話である。

「ちょっとまってよ、俺の負担が半端くないか」

「気のせいよ」

「そうか、気のせいか」

ちなみに現在位置は三階、ここから一階の学習準備室までは天竺の道並みに遠い。

「なわけあるか!」

ワンテンポおいて叫んだ俺に冷めきつた瞳で視線を贈る谷崎。殴るぞ。

「ちやつちなノリツッコミい。天下への道のりは遠いわね。罰としてこの机を一階まで運びなさい」

「天下なんざ目指してねえーし。いいからそつちの端を持って。いっしょに運ぶぞ」

一番厄介そうな質量を持つ予備の教卓に手をかける。

「人にものを頼むにはそれ相応の態度というものがあるんじゃない？」

「あのなー、俺はあくまでもお手伝いなんだぜ？」

「お手伝いさんなら、四の五言わずに作業をすべきね」

「完全善意のボランティアに対して多く求めないでください」

ぐちぐち言いつつ、机の端をしぶしぶ持つ。

整った顔立ちをもつ少女、谷崎琴音。彼女と仲良く会話できるだけで俺のパラメーターは他の人より多めにラックの種を食べたことがわかるのに、幼なじみともなれば、思春期を迎えた気分はラッキーマンだ。

「それじゃ、一階までね」

確認してから、教卓の予備を持ちあげる。夕焼けに支配された廊下をえつちらおつちら運んでいくそのさまは、端からみたらアリさんマークの引越しセンターのロゴのようになっていていることだろう。こつ、シルエツト的にね。

「このまま運んでもつまらないから、なにか歌でも歌わない？」

「歌？どんなだよ」

黙々とした作業から出し抜けに提案してきた。背後に気を配りながら茜色が落ちた階段をくだる俺にそんな余裕はない。

「そつね、郁次郎が好きな曲でいいわよ。なにかない？」

「そつだな、んじゃ、森のくまさん」

とはいえ脳裡に天恵に等しいグッドアイデアが降りてくる。さすが、おれ。

「なんでまた。流行歌とかでいいじゃない」

「ただし、あれだ。俺が本体の方歌うから谷崎は合いの手というか、替え歌の部分を歌ってくれよ」

「替え歌って、ある貧血ー、みたいなの？」

「そうそう、そんな感じ。んじゃいくぜ、ある日」

「貧血ー」

眉間にハテナのシワを寄せながらもしっかりと従ってくれる辺り彼女は天然だ。にやけが止まらない。

「森のなか」

「浣腸ー」

「くまさんに」

「ニンニクー」

「出会った」

「たんこぶー」

「花咲森の道」

「チ」

よしやああー！いただきました！

普段クールぶってる谷崎さんの口から容易く卑猥な単語をはかせるなんて、やっぱり俺は天才かもしれない！

「くまさんにであつたあ」

「たんこぶー、……ねえ、そんなににやけて、なにがいったい面白いの？」

「べつにいい」

知らなくてもいい世界というのがあるんだよ。

いやしかしこんなにもしれつと禁止用語吐くなんて彼女はバカなのかもしれない。

「一つ考えたんだけど」

もうなんていうか、戦後一週間の日本のほうがよっぽどきれいだよ！って感じの室内。

部室（便宜上そう呼ばせてもらう）に戻って、彼女は小さく呟いた。

「人手が、必要だと思うの」

「気づくのがおそすぎたね」

「やっぱり部員の確保を優先すべきだったかな」

まあ、まず誰も所属したいとは思わなйдらうけどね。

気持ちを新たに、別の机に手を掛けて、一階まで持っていくこと、持ち上げる。ひたすらその作業の繰り返しだ。

その一つを担いだ時だった。斜めにしたからか、中に入っていたらしい古雑誌が滑り落ちて、パタンと床に転がった。

む、これは、

「谷崎」

「なによ」

拾い上げながら、一種感動に似た懐かしさが俺に去来する。

「休憩しようぜ！」

「もしかして、その手に持ったジャンプに目を通そうとしてるわけじゃないよね」

「四年前のだぞ、気になるだろ」

当時の連載陣を思い浮かべる。

「最近猫も杓子も新連載起こしすぎだよな。もうちょっと長い目で作品を見守っていかないと。つつか、長期連載陣の引き延ばしが見苦しいよな。昔みたくきりがいいところで終わらせてやりやいの」

「掃除続けるの！ほら、さっさと机を運ぶ！」

「えーい、うるさい！女にはカピカピになった拾い物の雑誌の価値がわからないんだー！」

俺の訴えはあえなく却下され、しかたなしに作業に戻る。

いくら若い体力をもて余していようと、数分もこんなこと繰り返してれば、ばつちり肩で息をするようになっていた。

「小学校の時の朝礼で一つ覚えてるのがあってさ」

階段の登り降りに膝が悲鳴をあげ始めた、そんな折り語りだす谷崎琴音女史。目が憔悴しきっている。

「ほら、校長が話すじゃない？その一つで」

「校長つて、いつも朝礼が始まる前に、君たちが静かになるまで何分かかりました、って嫌味たらしく言うあのハゲ？」

「そうだけど……」

俺と彼女は同じ小学校の出身である。ちなみに幼稚園、小学校、中学校、高校までフルコンボで同じクラスだ。大学でも、もう一回遊べるどーん、とかになりそうで恐い。いや、喜ぶべきことなんだろうけど。

脱線した。ともかくにもあの、あら瓶土瓶ハゲ茶瓶の愛すべき中年オヤジの話を、谷崎は切り出してきたのだ。

「校長いわく、道に落ちてるゴミを1000個拾うのに1000人いれば一秒ですむ」

「えーと、やっぱリイナバ、1000人乗っても」

「違うわよー！」

「すまん、ちょっと何が言いたいのかわからない」

「ようは数は力。人は城、人は石垣。部員さえいればこんな苦勞ちやっちゃつとですむのに、ってこと」

「いやー、無理だと思っよ」

一度きりの高校生活を、訳のわからない倶楽部で消費したいと考えるバカはいないだろう。

「むう」と俺の意見が納得いかないらしい谷崎は頬を膨らませて、睨み付けてきた。

「どうしてそう思うの？」

「そもそも発足できるかも怪しいじゃん。落語部とか誰も興味ないし」

その部活の活動が、まったくもってふざけたものなのである。なんだっけ？古今東西あらゆる落語を追及する、だっけ？あほか。

「娯楽ら部！娯楽と倶楽部と愛するのLOVEがかかっているの！」

あ、そうか、そうそうそれぞれ。

「いい加減覚えてよ。郁次郎も入ってるんだから！」

「おい、ちよつとまで。俺は協力するとは言ったが、一度も入部するとは言っていないぞ」

「協力するイコール入部でしょ。違う？」

「ちやうわい！大体渡された診断テストみたいなのはビリビリにして、目の前で捨てただろ！」

今朝のことだ。俺の机に一枚の胡散臭いプリントが入っていた。抜粋して記載させてもらうと、

【Q、あなたの学校生活は充実していますか？

yes もっと充実させるため、娯楽ら部に入ろう！

no 娯楽ら部なら明るい青春をおくれるよ！】

【Q、友達はいますか？

yes 本物の友情ってやつを娯楽ら部なら体験できる！

no 娯楽ら部に入って友達を増やそう！】

【Q、娯楽ら部に入部しますか？

yes 入部届けは1年2組谷崎蓮華まで！

no 死ね！】

ちなみに俺は死を宣告されました。

進研ゼミの促進漫画や新興宗教の電話のがよっぽど信用度が高い。

「俺は部員が4人以上になったら入ってやる、それまではただの協力者だ！って言ったよな、確かに」

ちなみにうちの学校、羽路高校の最低部員数は5名であり、ようは、発足出来ないようなら諦めな、という幼なじみの良心的な線引きなのである。いや、正確には妥協である。

「私が四人分になる」

キリッ、って言われても。

「なにアホなこと宣ってはるんですか」

俺が今まで吐いてきた、ため息の数は、谷崎のアホな発言数でもある。

「部員ならいるじゃない。私たちの心のなかに」

「先生の前でも使える言い訳を用意しろよ」

「先生には私の隣の彼らが見えないんですか??てのはどう」

「スクールカウンセラー行きだと思っ」

ああ、なんだって5月の新緑が美しく陽光降り注ぐ爽やかな季節に、幼なじみと放課後まで居残ってこんな不毛な会話をしてるんだろっか、俺は。

歯車が狂いだしたのは、そう、あの夏。何処までも純粹で清純だった当時13歳の谷崎琴音が出会った、あの女。端正な顔立ちの癖に馬鹿げたことを行うギャップに、なぜだか知らないが、中1の谷崎は無性に惹かれたのだ。そのバカ女が件の娯楽ら部の所属だった、ただそれだけのこと。

「決めた!」

「訊きたくないけど、訊いとくよ。なにが?」

以来、俺の幼なじみは誰もが羨む美少女から、変なことを行う残念美少女に降格してしまったのだ。その女の人と『私、必ず羽路高校行って、娯楽ら部に入ります!』と指切りげんまんしていた蓮華の指を、過去に戻れることならそっとはどいてやりたい。

「本気で勧誘をしよう!」

「初めて具体的な方策が飛び出したところ悪いんだけど、部活のスカウト週間は4月に終わっちゃってるよ」

ちなみに一ヶ月間、彼女はなにしてたかというと、娯楽ら部を探し回ってました。そんな出落ちみたいな部活が生き残ってるわけないでしょうが!

それから30分くらい机の片付けを行い、どうにかこうにか部屋としての体裁を取り戻した室内は、残すところ掃き掃除と拭き掃除を行うだけとなった。疲れてあげることのできなくなった腕をダラダラんと杓死のように揺らしながら、

「この地球儀とか本はそのままでもいいのか？」

「それらは部室の備品よ。そのままにしよう」として

「この段ボールに手書きの日本地図はゴミ箱でいいだろ」

「ため！そのままにしとくの！」

埃を被ったガラクタの処分について聞いていく。絶対この部屋自体が他の部活の物置にされてただけだって。元からあったもんじゃねーだろ。

「はあー疲れたー」

ともかくにもようやく物運びが終わったのだ。パイプ椅子に腰掛け、白い長テーブルに伏せるように体を伸ばす。

「今日はもう帰るーぜ」

「そうね」

日はすでに落ち、白暗闇に室内は支配されている。さっさと帰って寝たい。

「郁次郎、今日はありがと」

「どーいたしましてー」

「それじゃ、明日は部員勧誘頑張りましょ」

「……」

こいつ話聞いてなかったな。

「だから勧誘期間は終わってるっの。残された手段は精々ポスタ一貼るくらいしかねーよ」

顔をガバリと上げて異議を申し立てる。先程もそう申しましたよね。

「私たちがするのは勧誘じゃないの」

やべえ、たち、って俺も確実に部員にカウントされてるよ。

「引き込みよ」

「はあ？」

「だから、狙った人物は確実に引き込む。以上」

「つまり勧誘じゃないと？」

「ええ、引き込みですもの」

「勧誘です！」

世間ではそういっのを勧誘って言うんです。

「だから私は明日までに娯楽ら部にピツタシの人物を選別しておくわ」

わああ、クレイジー。

時計を見れば、もうすでにいつもの帰宅時間を一時間以上もオーバーしていた。これ以上ここでグダグダやっていると、サラリーマンの帰宅ラッシュに巻き込まれてしまう。

なんだか要領を得ないまま、俺たちの娯楽ら部復活記がスタートしたのであった。

1：プラネットウェイプス（1）（前書き）

どうでもいいですが、ストックがこれにて終了です。

綴っていた第三話は不手際により消滅してしまいました。

書き直します、がんばります。

やっつけられっかー！！

1：プラネットウェイプス（1）

改札を潜ろうとポケットから定期を取り出したところ、申し合わせたように鈴を鳴らしたみたいな声が背後からかけられた。

「いくじろー」

聞き間違えるはずもなく、我が幼馴染み、谷崎琴音に相違ない。振り返ると手をブンブン振りながらこちらに駆けてきているところだった。

「つかれたー」

俺に追い付き、前屈みで呼吸を整えている。

「朝っぱらから元気澆刺だな」

「先に行っちゃうなんて酷いじゃない」

「……別に約束してないし」

加えて言うならそんな習慣もない。幼馴染みが朝起こしてくれるとか、どこの幻想だよ。

「おばさんにもう家出たよ、って言われて慌てて追いかけたんだから」

「そんな記念すべきイベントがあるなら前の方にアポイントいれといてくれー！」

「いべんと？どついう意味よ？」

自らの心情を吐露しすぎた。憧れのシチュエーションを逃すなんて、というお馬鹿120パーセントの邪な感情だ。まあ、いつしよに登校というのもポイント高いからいいけど。

「いや、なんでもねえ。そんでどうした、なんか用事があるんだろ？」

「そうよ、そう。ほらこれ」

谷崎は鞆から数枚のプリントの束を取りだし、俺に差し出した。

「なんぞこれ、リスト？」

一組から順々に名前が書いてある。疑問なのは数名の名前の横に赤ペンで丸がつけられていることだ。そんなかに自分の名前があることに気付いてどきりとする。

「昨日約束したじゃない」

「うむ？」

「娯楽ら部の勧誘リストよ」

凄くいい笑顔で俺の不安を払拭させた彼女はまた新たな不安を植え付けた。

なんて最悪な赤ペン先生。FBI捜査官リスト並みに不吉だ。

電車に揺られて数分、学校の最寄り駅に到着した。キオスクで昼食のパンを購入し駅構内を出て、一路羽路高校を目指す。本格的に授業が始まりだしたのだ。幼馴染みと馬鹿げたことにうつつを抜かず暇はない。黙ってれば誰もが羨む美少女なのに、頼むからこれ以上要らぬ心配を増やさないでほしいところだ。

「これって入学の時に配られたクラス名簿だよな」

電車に乗る前に渡されたりリストを歩きながら取りだし、もう一度目を通して見る。

通学路は制服を着こんだ連中の大名行列みたいになっていた。パリティと新しい制服に身を包んだ一年の表情はみな晴れ晴れとしていて、その一方、俺の憧れのスクールライフへの第一歩を踏み外した感否めない。

「チエック入ってる人が勧誘対象の有力候補なんだよな」

「ええ」

首肯する。だったら俺のチエックを外してくれ。

「どんな基準でチエック入れたんだ？」

丸がつけられた生徒たちにこれと言った共通点は見られない。男女比もバラバラだし、クラスごとに選ばれた人数もまちまちだ。

「6組なんて一人もチエックはいつてないじゃん。あ、もしかしてもう既に部活入ってる人は除いたとか」

「名前がかっこいいひと」

「……………」
1組、天王洲愛流、龍造寺海月、六角海星、島津いるか、大友心太……………」

一組だけでお腹いっぱいなラインナップだ。チエツク入った人たちには悪いが、海洋類が約三名いらっしやる。なんだよクラゲにヒトデにイルカ、ところてん!? もはや隠す気ゼロだなっ!?

「珍しい苗字と名前の人を優先的に勧誘した、ってわけ? 珍名クラブでも作る気か?」

「だってほら、苗字がかっこいいと選ばれし者、みたいな感じするじゃん」

「おめえ、『谷崎』だろ」

「……………」

多くはないが決して珍しい苗字ではない。

「でも、郁次郎は『海野』じゃん。珍しいじゃん!」

「そうかあ、けっこういるだろ。って、俺はまだ入部してないっての!」

あつぶねー、普通に流されるところだったぜ。

「それに、珍しい苗字のなかに普通の苗字が混じれば紛れてわからなくなるわ。谷崎だつてきつと!」

「よけい浮くつての!」

「でねっ、私がいま一番注目してるのがこの人」

俺の言葉を無視して、プリントの一名を指差す。

「よりもよつて『天王洲アイル』かよっ!」

ああ、突っ込まないようにしてたのに!

憂鬱な現状に頭を抱えながらも、時間はジクジク過ぎていく。というわけで中休み、件の天王州さんをサンクガーデンに呼び出したという報告にガツクリ肩を落しながら、俺たちはベンチに腰掛け、彼女が来るのを待っていた。そういっただけ無駄に行動力あんね。

「天王洲さんは、かの有名な16財閥の一つ愛流コンツェルンの末裔で英才教育を施された天才美少女なのよ」

「待ち合わせまでの間、天王洲愛流なる人物の基本情報のレクチャーを受ける。」

「ひよっとしてギャグで言っているのか？愛流コンツェルンなんて聞いたことないぞ。」

「って、おもつくそバカにしたら事業内容をこと細かに説明された。割愛。」

「とにかく愛流さんについてね。一人称は『ぼく』、双子で妹。一組ではクラス委員長を務めてて、容姿はかなりの上玉、黒髪ロングでスタイル抜群。性格は若干天然が入ってるらしいわ」

「一人でどれだけキャラ立てするんだよ！欲張りすぎだろ！」

「ねっねっ！絶対欲しいでしょ？」

「そんなやつが近くにいたら俺の個性が無個性になっちゃうじゃねえか！」

「天王洲さん一人で百人力よ！倶楽部に絶対必要なの！そう思わない？ねえ！？」

物凄い勢いで同意を求められる。

「いや、まてまてまて、そんな完璧超人、まだ設立されてもない部活に入ってくれると思うか！？」

「ふふふ、ネゴシエーターの血が騒ぐわね」

「お前のオヤジ市役所公務員じゃねーか！」

母親は専業主婦である。

「あっ、きた！」

「交渉はてめーがやれよ！」

絶対断られるだろうけどな！

ふわりと春風をまといサンクガーデンに現れた少女は、まるで文学作品のヒロインみたいな清纯さをその身から溢れさせていた。腰

まで垂れたつやのある長い黒髪、肌はきめ細かく雪のように真っ白だ。深窓の令嬢といった体、蝶よ花よと育てられてきたに違いない。頭で彼女のステータスを反芻してみる。

委員長、妹（双子）、お嬢様属性！ロリ巨乳（たったいま判明）。
「僕を呼び出したのは君たちかい？」

加えてぼくっ娘。リアルで会うと痛々しいとは聞いてはいたが、別段気にはならない。アルル以外に嫌悪感を抱かない人物がこの世にいようとは！

彼女は少しも不機嫌そうな表情をせず、不気味な穏やかさをもって俺たちにそう問いかけた。

「ええ、私は二組は谷崎琴音。こっちの呆けてるのが海野郁次郎よ、よろしくね」

「僕は一組の天王州愛流」

右手を気さくに差し出してくる。それを谷崎は両手で受け取りブンブンと上下に揺らした。

「それで用というのは？こう見えてもなかなか忙しくてね。要件は手短にお願したいんだが」

「合点承知の助。それじゃ単刀直入にお聞きするわ。天王州さん、ズバリ、クラブに入ってる？」

まじで核心ついたな、と横で感心する。その質問に一瞬キョトンとしていた天王州さんは、数秒してから妙な笑みを浮かべた。

「これは勧誘かな」

はやくも感付かれたっ！返答次第で、勧誘自体なかったことにされる。でもどう答えていいか、わからない。極限まで張りつめた空気のなかで、谷崎が選択した答えは……、

「ええ、娯楽ら部にはいつてー！」
偽らないことであった。

ストレートに吐き出された谷崎の回答に天王州さんは数秒ポカンとしていた。

「娯楽ら部？聞いたことのない部活だが」

「古今東西三千世界、娯楽を通じ無明の煩惱を追求する、古来より続く、由緒正しき部活よ！」

もしかして相手がお嬢様だからそれに合わせて活動内容もパワーアップしてるのか？

「僕が覚えている限り、そんな部活はなかったような気がするんだが」

「メンバーはまだ、私と、その郁次郎と天王州さんしかいないわだから今なら望む地位を与えることが出来るってわけ」

ナチュラルにメンバーに加えられている俺と天王州さん。

「む。三人、ということはまだ設立されてないじゃないか」

「そこに気づくとは……やはり天才か……」

よいしょをやめる！普通気づくよ！

天王州さんは思案顔になって、口を引き結んだ。痺れをきらせたのか谷崎はワンオクターブ高く、声をあらげる。

「今なら副部長の地位を進呈するわ」

「……」

「え、永遠の安心感も……」

「……」

「うっ、っ、ぶ、部長も、考えようによっては譲る、けど？」

おずおず相手の様子を伺う谷崎。断るに決まってるのに、まったくもって惨め、

「いいよ」

「本当っ!？」

まさかの快諾っ!？

ど真ん中をホームランで返されたみたいにあっさりしている。

「君たちが僕の野暮用を手伝ってくれたらね」

とまあ、そんな甘い話があるわけないっか。

「交換条件ってわけね。いいわ。言ってみて。こっに見えてもウチの郁次郎はクエストクリアが元来の趣味なの」

モンハンの話である。

「お言葉に甘えさせてもらつよ。僕はね、宇宙人に会いたいんだ」

聞き間違いか？

「え、宇宙人？」

「地球外生命体でもいい」

「いや、まて落ち着け」

人任せて突つ立っておこう考えていたのに、思わず声を出して
いた。

「何て言った、いま？」

震える声で、そう尋ねる。

「耳悪いわね郁次郎、天王州さんは宇宙人って」

「谷崎にはきいてねーのっ！」

少し黙っていてくれ。というかなんでこいつは平然と受け止めて
るんだ！？

「エイリアンだよ、君。僕は宇宙人に会いたいんだ」

「いやいやいや、無理無理！いないって！」

「むう、仕方無いな、UFOでもいい」

「そういう話じゃねえ！」

この人電波や。サイコ！

「宇宙人？地球外生命体！？初対面で悪いけど、そんなもの見つかる
わけじゃないですか！」

「やってみなければわからない。世界には無限大の可能性が溢れて
いるとおもわないかね？」

「もし宇宙人がいたらNASAかJAXAがとっくに見つけてるっ
て」

「陰謀論をここで論じる気かい？」

不敵な笑みで、俺のことを見返す。柔らかそうな頬にピンク色の
唇、思わずギュッと抱き締めたくなつたが、まだ捕まりたくないの
で、グツと我慢した。

「仮に宇宙に生命体が存在しないと仮定しよう。すると、どうだ？

我々は？我々は地球人である！広い宇宙をマクロ的に俯瞰したとき我々こそが宇宙人の存在証明なのだよ！」

な、なんだってー！という前に、

「あんたバカだろっ！」

思わず叫んでしまっていた。

「バカでけっころう！ドレイク方程式におけるレアース仮説なんてくそ食らえだ！フェルミのパラドックスがあるだろう！」

「知らねーよ」

さつきからなに不思議な呪文唱えてるんだ？この人。

「文明進化は人類の衰退を意味するのだよ。高度な科学力をもつ異性人に頼らなくては、地球はこのままではダメになってしまうんだ！」

アイタタタ。右手で軽く額を押さえて、俺は静かに頭を抱えた。

僕っちはギリギリで許せたけど、真正電波は俺にはちょっと辛すぎた。

天王州愛流は俺の態度が気に入らないのか、微かに頬を膨らませた。

「君たちはいつもそつだ。僕がこの話をするといつも頭を抱える。

訳がわからないよ」

「あ、いえ、ご高説痛み入りました」

できるだけ笑顔でそう告げて、背後の谷崎の肩に手をのせ、耳元で囁く。

「おい、わかってると思うけど、この人をメンバーに加えるのは」

「ええ……」

神妙な面持ちで彼女は顎を引いた。君子危うきに近寄らず、電波に関わるのは大変危険。さすがに谷崎にも分別というものを弁えて、「手伝うわ！宇宙人探し！」

「本当かい！？」

ああ、薄々感づいてたよ。谷崎も若干電波だった。

「ええ、ただ娯楽ら部の件も」

「ああ、ギブアンドテイク、君とは仲良く成れそうだね！」

あんぐり開けすぎた口が塞がらない、なに？なに？俺がアウエイなの？

「たーにいざあきい！！」

イントネーションはナースのお仕事で朝倉を呼ぶときとの発音と同じである。

「宇宙人探しつてまじでいつてんのか！！」

「郁次郎だって、天王州さんの話を聞いて理解したでしょ？」

「は？」

「宇宙人は地球に来ている！」

「……ああ、まったく理解しないということ、理解したよ……」
もう、だめかもわかんね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9861x/>

少女ジグザグ暴走中

2011年10月28日07時07分発行